

令和 6 年 4 月 30 日現在

機関番号：23102

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14167

研究課題名(和文) 聴くスキル尺度を活用した、話を聴くことに対する意識ならびに聴き方の使い分けの検討

研究課題名(英文) Examining attitudes toward listening and the proper use of listening in different situations; utilizing listening skills scale.

研究代表者

藤原 健志 (Fujiwara, Takeshi)

新潟県立大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：80715160

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、(A)聴くことに関する意識を探索的に検討し、これら意識が聴くスキルの各要素とどのような関連を有するか明らかにすることと、(B)聴くスキル尺度を活用し、状況に応じた聴き方の使い分けの有効性を明らかにすること、の2点であった。(A)については、(a)保護者が子どもの話を聴くときの意識や(b)夫婦間で話を聴いている時の認識について調査を行い、両者の尺度化を試みた。(B)については、大学生を対象に調査を行い、3つの仮想場面を通じて、聴き方に変化を持たせている可能性が示唆されたほか、こうした変化を持たせた聴き方が全般的な社会的スキルと関連を有する可能性についても明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で得られた研究成果とその公表を通じて、聴くことの背景にある様々な価値観を明らかにし、それが対人場面における聴き方やその後の適応に影響を与えることを明らかにした。幅広い年齢段階における聴くことの重要性を示すとともに、コミュニケーション行動の背景とその影響を心理学的観点から詳細に検討することが可能となったことに、高い学術的意義を有すると考えられる。こうして得られた知見を広く一般に公表することによって、聴くことを含むコミュニケーション向上のためのよりよい研修機会の提供に資するなど、社会的意義も深いと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study were (a) to examine attitudes toward listening in an exploratory manner and to determine how these attitudes relate to each component of listening skills, and (b) to utilize a listening skills scale to determine the effectiveness of using different listening skills in different situations. For (A), two scales were made for which measuring (a) parents' awareness when listening to their children and (b) couples' perceptions when listening to each other. For (B), there were indicated that adolescents used different pattern of listening skills for different situations, and these forms of listening style had positively correlated overall social skills.

研究分野：発達心理学

キーワード：聴くスキル

## 1. 研究開始当初の背景

**ソーシャル・スキルとしての聴くスキル** 人の話を聴くことの重要性は、数多くの啓蒙書や各種統計調査により明らかとなっている。約6割の青年が、付き合いやすい友人として「自分の意見を聞いてくれる人」を選択し(日本青少年研究所, 2004)、就職活動においても、採用の際に最も重視されるのはコミュニケーション能力であることが、一貫して示されている(厚生労働省, 2004; 日本経済団体連合会, 2010)。同様に、聴くスキルの重要性はソーシャル・スキルの研究でも指摘されており、小中学校において聴くスキルの教育的ニーズは高く(藤枝・新井, 2008; Meier et al., 2006; 中台他, 2003)、学校(藤枝, 2006; 後藤他, 2001; 本田他, 2009; 金山他, 2003)や就業者(松本他, 2014; 武原他, 2001)での実践において、標的スキルとして取り上げられている。また多くのソーシャル・スキルを階層的にとらえる試みにおいても、聴くスキルに該当する解読力や他者受容のスキルは、基本的・対人的スキルに配置されている(藤本, 2013; 藤本・大坊, 2007)。こうしたことから、聴くスキルは数あるソーシャル・スキルの中でも「基本中の基本」とされており(相川, 2010)、社会からの研究ニーズも非常に高い。

**聴くスキル研究の課題と理論モデルの導入** 一方で、従来の研究では、聴くスキルは数あるソーシャル・スキルの一つとして扱われているに過ぎず、「他のスキルに比べて、聴くスキルがどのような点で基本かつ重要であり、適応感を向上させるのか」という点は不明確なままであった。また、調査対象者の実態を重視した“ボトムアップ型”の研究が多く、背景となる理論に基づいた聴くスキルの詳細な理論的検討は不十分であった。

こうした状況を受けて、応募者はこれまで、聴くスキルに関する基礎的な研究を進めてきた。具体的には、聴くスキルの構成概念として、Brownell(1985, 2009, 2017)のHURIERモデルに注目した。このモデルは、聴くことを6つの構成要素からなるプロセスとして捉えて概念化している(Figure.1 参照)。近年では、状況や相手に応じて、6構成要素の使い方を変えながら話を聴くことが提唱されている(Brownell, 2017)。

### 応募者のこれまでの研究と課題

応募者は、このモデルに対応する形で、青年(中学生・高校生・大学生)を対象に、聴くスキルを認知(HURIERモデルの「反応」を除く5要素)と行動(HURIERモデルの「反応」部分)の両側面から多角的に測定する心理尺度を開発し、聴くスキルの先行要因ならびに獲得・実行による適応感向上のプロセスモデルを検討した(藤原・濱口, 2011, 2012)。

その結果、対人動機の1つである親和動機が聴くスキルを高め、高められた聴くスキルが他者からの侵害感を低減することが示された。また攻撃性や不安・抑うつとの関連を検討したところ、聴くスキルの中のいくつかの構成要素がこれらと負の関連を有することが示された(藤原・濱口, 2015)。このように、HURIERモデルに基づいて測定される聴くスキルは青年の聴くスキルを多面的に捉え、各要素が適応感に対して異なる寄与をもたらしていることが示唆されている。

一方で、スキルの使用は、相手や文脈などの状況に応じて変化させていくことが必要とされているが(Brownell, 2017; Rhodes, 1993; Wolvin & Coakley, 1993)、従来の基礎研究ならびにスキルトレーニングでは、この点までを考慮した聴くスキルの研究・訓練プログラムの開発が行われていない。コミュニケーション能力の重要性が長く指摘され続けているにもかかわらず、基礎研究は立ち遅れた状況にある。どのような状況において、聴くスキルのどの要素に重点を当てて聴くことが適切なのかについて、理論モデルを踏まえた検討が待たれる。

また、Figure.1 に示した通り、HURIERモデル(Brownell, 1985, 2009, 2017)では、6構成要素に対して、個人が持つ様々なフィルターが影響することが示唆されているが、これら要因の整理と実証はいまだ不十分である。そもそも、他者の話を聴くことや聴くスキルに対して抱く価値観やメタ認知により、スキルの獲得や実行は大きく左右されると考えられている(Lundsteen, 1993)。これまで、「関係の深まり」や「視野の広まり」といった聴くことの意味(江角・庄司, 2015)、ソーシャル・スキルの改善意欲(久木山, 2005)に関する研究はかねてより散見されるものの、聴くことに関するこれらメタ認知的要素が、実際のスキル獲得や実行、その後の適応感に寄与するかどうかについての検討は行われていない。

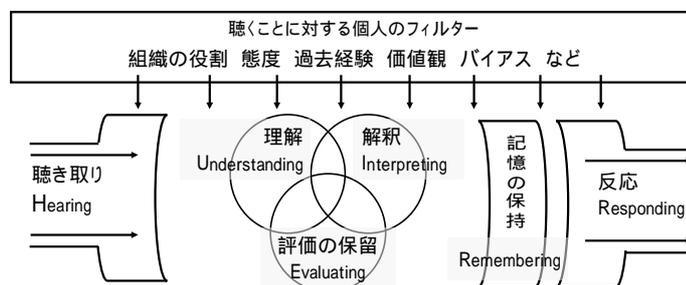


Figure. 1 HURIERモデル(Brownell, 2009, 2017)

## 2. 研究の目的

以上を踏まえ、【本研究の目的】は以下のとおりであった。

- (A) 聴くことに関する意識を探索的に検討し、これら意識が聴くスキルの各要素に与える影響を明らかにすること

(B)HURIER モデルに基づいて作成された聴くスキル尺度(藤原・濱口, 2013, 2014)を活用し、状況に応じた聴き方の使い分けの有効性を明らかにすること

従来、学校や企業で聴くスキルの研修・授業が数多く行われているが、スキル内容の選択やその有効性はエビデンスに乏しく、実施者の恣意的な選択に委ねられてきた。こうした“ボトムアップ”型の説明・提案にとどまらず、状況に応じた聴き方の選択や聴くことそのものの意識がスキルの実行に影響するプロセスを、本研究の知見に基づいて“トップダウン”的に説明・提案することにより、スキル訓練における受講者の動機づけを高めることが、スキル獲得ならびに向上に寄与すると考えられる。

聴くことに関する上記の研究は、海外でも理論の提唱レベルにとどまり、心理学の方法論を用いた実証は行われていない。基礎的研究であると同時に、教育や企業での実践活動に対して重要な示唆を与えるものとなる。

### 3. 研究の方法

研究の大目的に対して、一般サンプルを用いた質問紙法に基づく Web 調査を複数回行った。具体的には、上記目的 A について、状況に応じて聴き方をどのように変化させているのかを、複数の仮想場面を用いて検討した。また上記目的 B については、子どもを持つ保護者を対象に、子どもの話を聴くことに関する認識と、その認識が実際の聴き方や子どもの適応感に与える影響を検討するとともに、夫婦を対象に、パートナー(夫婦)の話を聴くことに関する認識と、その認識が聴くスキルや夫婦満足感などの適応感に与える影響について、夫婦ペアデータの収集と分析から検討した。

なお、研究期間は新型コロナウイルス感染症の流行期間と重なったことから、Web を通じた非対面調査を積極的に導入するとともに、新型コロナウイルス感染症流行前後で対面コミュニケーションの在り方がどのように変化したのかについても、併せて検討を行った。

### 4. 研究成果

本研究課題にかかる成果は以下の通りである。

#### 【目的 A】聴くことに関する意識とモデル各要素の関連

#### コミュニケーションに関する意識の変化についての調査

研究期間(2020 年度～)は、新型コロナウイルス感染症の流行により、対面コミュニケーションの機会が大きく失われた。こうした社会情勢の中で、聴くことを含めたコミュニケーションそのものに関する意識の変化について調査を行った。大学生 300 名を対象とした Web 調査(調査時期: 2021 年 10 月)を行い、コミュニケーションの在り方の変化の有無、変化した場合にはその内容について自由回答を求めるとともに、変化にまつわる諸感情の該当の有無を尋ねた。その結果、「大きく変わった」(42 名; 14.0%)と「少し変わった」(106 名; 35.3%)を合わせると、回答者の約半数が、COVID-19 流行前後においてコミュニケーションの在り方に変化があったと回答した。変化の具体的内容については、記述された内容について、形態素分析を行った上で共起ネットワーク分析にて、各語の関連を検討した(右図)。その結果、直接会う機会の減少とオンラインでの交流の増加、久しぶりの対面機会での緊張感や戸惑い、マスク着用による感情読解の難しさを感じていることが明らかとなった。コミュニケーションの変化についての受け止めでは、回答者自身に該当していると回答した形容詞はネガティブな内容がやや多かったほか、特にコミュニケーションが「大きく変わった」と回答した者において、「疲れた」や「悩んでいる」、「退屈な」などのネガティブな形容詞への該当者の割合が大きかった。

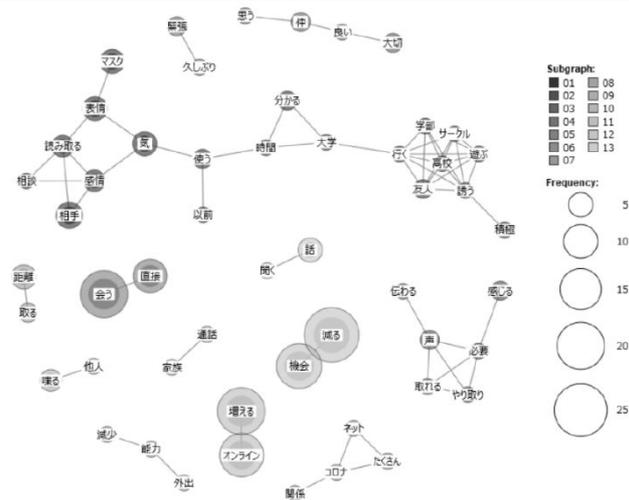


Fig. 共起ネットワーク分析の結果

これら研究成果について、下記の通り学会発表ならびに学会誌への投稿を行った。

- 藤原健志 (2023). 新型コロナウイルス感染症流行下における大学生のコミュニケーションの変化; 自由記述調査と変化に対する感情からの理解の試み 人間生活学研究, 14, 1-9.
- 藤原健志 (2022). 新型コロナウイルス流行下における若者のコミュニケーションの変化 日本カウンセリング学会第 54 回大会発表論文集, 88.

#### 聴くスキルを左右する聴くことへの意識の検討と、その影響

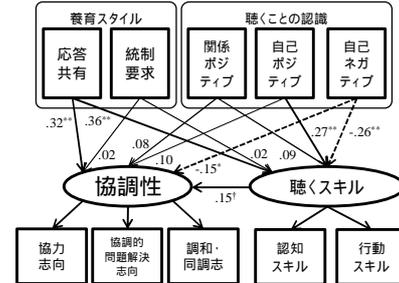
本研究課題では、聴くことの各要素に影響を与えられる聴くことの認識に注目し、それらが効くスキルとどのような関連を有するのか、またそれらが子どもの適応感とどのよう

に関連するのかを検討した。小学生の子どもをもつ両親 400 名(男女 200 名ずつ)を対象に、Web 調査を行った。子どもの話を聴くことに対する考え方について因子分析を行った結果、子どもとの関係に対するポジティブな認識、親自身に関連したポジティブな認識、親自身に関連したネガティブな認識、の 3 因子が見いだされた。これらはいずれも、係数の算出による十分な内的整合性が確認されたほか、聴くスキルの下位因子と事前の想定通りの有意な正負の相関係数が確認され、一定の基準関連妥当性が示された。

次いで、聴くことの認識をモデルに含め、聴くスキルが子どもの適応感とどのように関連するのかを明らかにするためのモデル検討を行った。本研究では子の協調性を取り上げ、親の聴くスキルとの関連を行った。その結果(右図)聴くことの認識の一部は子の協調性と関連を有していたほか、聴くことの認識は親の聴くスキルを介して子の協調性と正の関連(有意傾向)を有していた。今回、子どもの話を聴く親のスキルや、その背景にある認識を尺度化したことによって、親子間のコミュニケーションを定量化し、子の適応感を左右する要因の詳細な検討が期待される。

これら研究成果について、下記の通り学会発表を行った。この他、2023 年度には夫婦間における話の聴くことに関する認識を調査し、夫婦間の人間関係スタイルや夫婦満足感との関連を検討している。今後、詳細な分析を経て、学会等での発表を準備している。

Figure  
パス解析の結果(概要)



Note. \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$

藤原健志 (2023). 保護者が子どもの話を聴くスキル 聴き上手な親を持つ子どもの育ちとは? 日本教育心理学会第 65 回総会発表論文集, 106.

**【目的 B】状況に応じた聴き方の使い分けと、その有効性の検討**  
**話の聴き方の使い分け**

話の聴き方の使い分けについて、大学生を対象とした Web 調査を行った。友人との会話を想定させる架空場面について、一般的会話場面、退屈な会話場面、友人からの相談場面の 3 場面を設定し、各場面でどのような聴き方で話を聴くのかを尋ねた。調査対象者を一般的なコミュニケーションスタイルに応じ、クラスタ分析を通じて 4 つに群分けし、群ごとに、3 場面の聴くスキル得点を分散分析により比較した(右表)。その結果、全般的に、(a)退屈な会話よりも、日常会話場面と相談場面において聴くスキルを活用していること、(b)自己表明や他者理解など全般的にコミュニケーション得点が高い青年や、他者受容を重視する青年において、聴くスキルが高いことが示された。これら研究成果について、下記の通り学会発表を行った。

藤原健志 (2022). 話の聴き方の使い分けの検討 場面による聴き方の変化 日本心理学会第 86 回大会発表論文集, 597.

Table  
コミュニケーションスタイルと場面による聴くスキルの使い分け  
分散分析結果

		F 値	(df)	多重比較
理解・記憶	場面	44.30	** (2, 438)	. >
	クラスタ	23.74	** (3, 219)	a > b, c, d / c > d
	交互作用	1.43	(6, 438)	
集中・共感	場面	14.57	** (2, 438)	. >
	クラスタ	23.04	** (3, 219)	a > b, c, d / b > d
	交互作用	0.76	(6, 438)	
評価・判断の保留	場面	9.73	** (2, 438)	. >
	クラスタ	24.00	** (3, 219)	a, b > c > d
	交互作用	0.66	(6, 438)	
言語的応答	場面	9.38	** (2, 438)	>
	クラスタ	13.50	** (3, 219)	a > b, c, d
	交互作用	0.84	(6, 438)	
あいづち	場面	6.99	** (2, 438)	> .
	クラスタ	14.27	** (3, 219)	a > c > d / b > d
	交互作用	0.85	(6, 438)	
前傾姿勢	場面	19.96	** (2, 438)	. >
	クラスタ	3.68	* (3, 219)	a > d
	交互作用	1.71	(6, 438)	
アイコンタクト	場面	13.85	** (2, 438)	. >
	クラスタ	14.32	** (3, 219)	a, b > c > d
	交互作用	0.24	(6, 438)	
通らない	場面	4.01	* (2, 438)	>
	クラスタ	6.76	** (3, 219)	a, b > c
	交互作用	1.75	(6, 438)	

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$   
各群のnは、a=52, b=41, c=104, d=26である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 藤原健志	4. 巻 14
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症流行下における大学生のコミュニケーションの変化；自由記述調査と変化に対する感情からの理解の試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人間生活学研究	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤原健志
2. 発表標題 保護者が子どもの話を聴くスキル 聴き上手な親を持つ子どもの育ちとは？
3. 学会等名 日本教育心理学会第65回総会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤原健志
2. 発表標題 新型コロナウイルス流行下における若者のコミュニケーションの変化
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第54回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤原健志
2. 発表標題 話の聴き方の使い分けの検討 場面による聴き方の変化
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Researchmap  
<https://researchmap.jp/takefujii>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------